信長殺しは秀吉か

八切止夫

信長殺しは秀吉か

八切止夫

信長殺しは秀吉か
（検印省略）

定価　四〇〇円

昭和四十六年九月二十五日　初版発行

著者　八切止夫
発行者　八巻明彦
印刷所　凸版印刷株式会社
発行所　報知新聞社
郵便番号一〇二
東京都千代田区平河町二ノ一ノ一
振替　東京一九五八四五

©T. YAGIRI
落丁．乱丁本はおとりかえします。

もくじ

織田源五郎　3
御坊源三郎　19
山岡道阿弥　45
斎藤玄蕃允　69
奇蝶美濃御前　108
一品誠仁親王　129
木村弥一郎　156
杉原七郎左　178

小野木縫殿助 204
羽柴筑前守秀吉 224
後記 254

■装丁・扉　村上　豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

織田源五郎

1

——本能寺の織田信長殺しは、明智光秀。と、せっかく決って居るものを、今になって、それは間違い。まことの犯人は別にいると、詮議だてすることは、鳥滸の沙汰かも知れん。が、それをあえて、せねば、おことの身のあかしも立つまいし、故右府さまとて、冥福できなさらぬ、かも知れぬな。

と、云ってくれていた、駿府の大御所。

さきの征夷大将軍、徳川家康が、この元和二年（一六一六）四月十七日に、ついに七十五歳の生涯を、あえなく終えてしまったのである。

だから、

——おりゃ、どうすりゃ良いんじゃ。

織田有楽は泣いた。三日も四日も床にふせったまま、哭きにないた。

むなしい虚ろさが、ひしひしと肩から背柱を、ぐっと羽がい締めにするようにして、おくびが、脇から心の臓をつらぬき、吐息になったり、溜息になって出た。

眼くらやみと云うのか、くらくらと頭の血が下ってしまい、瞼が、かさかさに干からびて疼き、俄かに、あたりが真っ暗になって、てんで何も視えなくなってしまう事さえ、たび重なってあらわれだした。

——おりゃ今日まで、なんで生きとったか。これで、もう、まるっきし無駄になったわ。

近侍の者も遠ざけ、有楽はひとりで、涙がかれても、枕を抱え哭き通した。

——豊臣の世でさえ、もう遠い昔のように思っとられる、当代将軍家の秀忠公では、織田の天下など、とうに忘れてござろう。今になって織田信長を殺したのが、まことは誰であったか、などと云うことは、てんで御頓着もなさるまい。もはや今まで集めたものも、これで、みな役たた

ずになりおわせたわい。
締木に掛け、搾られるように胸詰りした。
下腹も疼いてくる。烈しく痛みをよんだ。
——もう、こうなっては、己が身のあかしも、立てられん。何事もすべてが、もう、わやになってしもうたんじゃやな……
有楽はうつ伏せに腹をおさえて嗚咽した。
——人というものは、こない無駄な、なんにも役立ん、目途のない骨折りをして、そんで一生を、終ってしまうもんじゃろか。
口惜しさと、きつい差込みに襲われて、有楽は歯ぎしりをしながら涙をすすった。

織田備後守信秀の三男が、織田信長。
末子の十二男とされているのが、織田源五郎長益。いまは有楽を名のっている。
この春から出府して、江戸住いしていた。
千利久門下の〈七哲〉の一人に算えられ、元伯、宗旦と並んで、茶湯の大家ともてはやされ、己れでも、有楽流の開祖として、点前などにも、新しい流儀を編みだしている。だから茶匠として悠々自適の生涯をすごしているものとばかり、関東では思いこまれ、数寄屋橋の堀美作屋敷の斜め前に敷地を貰い、己が邸宅をもうけると、土佐町わきの、この一角を、人よんで、有楽町。
次の鍛冶橋まで、ずっと曲り道をするのも大儀ゆえ、掛板を渡し酒井右近邸の前へ出られるようにすると、これも便利がられて、有楽橋と、名づけられた。
そこで、人々に親しまれ、東国へ移ってからは、やっと解放されたような、心のくつろぎを覚えだした。だが、それも束の間のことだった。また門塀などに墨くろぐろと、「裏切り有楽」「腰ぬけ有楽」
といった貼り札をされるようになった。
(昨年五月八日に落城した大坂方の残党の仕業であろう)
とそのたびに牢人取締の役むきが、小田原口の番所から駆けつけてくる。

これは、一昨年の慶長十九年十月三日。
徳川家康の大坂征伐の布令に愕いた淀殿が、叔父にあた

る織田有楽を、大坂城へ招き入れ、対抗馬にと担ぎだし、関西側の総大将として軍配を預けたのが、ことの起りである。

この戦を俗に、大坂冬の陣とよび、有楽としては、可もなく不可もなく大坂城内十万余の兵を指揮して抗戦。別に攻めこまれても、敗けもしなかった。

そのため、攻めあぐんだ関東方は十二月二十日に和議を結んだ。

そこで有楽は、大坂城を出ると上洛。

洛外建仁寺の塔頭正伝院に入った。そこで、自己流の茶席を建て、如庵と号して、茶道に専念していると、年があけて、また開戦。

しかし今度は呼びに来られても、招きに応ぜずにいると、これが去年の大坂夏の陣。

——一年前の総大将のくせに、知らぬ顔をして、みすみす淀君と秀頼を見殺しにされた。

と、洛中洛外に悪名がとどろきわたり、挙句のはては、〈徳川秀忠の室になっている姪の江与の方の手引きで、有楽が大坂城の惣堀をうめさせ、関東方に勝利を与えた〉そして前もって結果が判っているからこそ〈今度は籠城せずに、京都の建仁寺に隠棲していたのだ〉とさえ蔭口をされた。

江与の方とは、今の将軍家の御台所だが、さきに尾張の佐治与九郎に嫁ぎ、のち秀吉に連れ戻されて、その養子羽柴秀勝の妻となり、その死後は九條左大臣に嫁入って、秀吉のため禁裏の蔭に骨を折らされ、その後二十三歳のときに、また秀吉の養女として、文禄四年伏見城で、当時十七歳だった徳川秀忠に、四度目の嫁入りさせられ、江戸へ与えるのだからと、〈江与の方〉と改名された、淀殿の末の妹である。やはり浅井へ嫁いだ於市御前の娘ゆえ、織田有楽とは叔姪の間柄になっていた。

——人の口に、戸など立てられもせん。

といっても、限度というものがある。

堪りかねて有楽は、そこで大和の所領を、上の伜長政には芝村一万石。下の尚長には柳本一万石と等分に分け与え、自分は、駿府の家康にすすめられるまま出府し、落着いて、これまで集めたものを整理し、兄の織田信長の死を、瞭かにさせようとしたやさき、思いがけない、頼みの綱の

家康の訃に接したのである。

だが考えれば、裏切り呼ばわりをされたり、腰ぬけと、罵られるのは、なにも、今になって始まったことでもない。

兄信長と、その嫡男信忠が不慮の死をとげ、一年とたたぬうちに、秀吉は、岐阜に移っていた織田信忠の弟、三七信孝と仲違いして、これを攻めた。そして助力した柴田勝家や滝川将監を討ってから、信孝の異母兄に当たる織田三介信雄をやって、信孝を尾州野間で殺させたが、そのときも、有楽は、仲介に入らず、甥を見殺しにしたからと、

——虜外者。と、冷ややかに取り沙汰された。

その翌年の天正十二年四月。今度は、織田信雄と秀吉が手を切って、徳川家康が、これを尻押し小牧長久手の合戦が、尾張であった。

その時も、せっかく参陣して、信雄に味方したのに、ろくに戦をせぬからと、

（あれでも、二年前に歿くなられた天下さまの実の兄弟なのか……織田信長さまも、とんだ不所存者の、げてな弟殿を残されたものよ）

と散々に、嘲弄されたものである。

蔭口とは厭やなものである。そこで耐えられなくなって頭をまるめ、織田長益から有楽と、小田原陣の後からは、とうとう改名もした。

十五年たって、次に関ケ原役が起きた。

岐阜城の跡目をついだ、嫡男信忠の亡れ形身の三法師が、織田秀信と成人し、西軍に加担した。だが、利あらず敗れて、福島正則に捕えられ、芋洗里に移された。そして剃髪させられ高野山へ追われ（後顧の憂いのないように）と家康の家来の手で二十一歳で死なされてしまった。はっきりと、織田の正統は断絶した。

すると、

——命惜しさに、己れは東軍に加担して、日和見してござったとは、まこと卑怯未練な。よくもまあ、おめおめと生き恥をさらされる。

と酷評され、まるで、人でなしのようにさえ、有楽は誰からも爪はじきされた。

2

——馬耳東風。

そんな、つもりでいようと心がけた。

——云いたい奴には、喚めかしておけ。

まるで、悟りをすましたみたいに、外面はとりつくろった。それも、ひとつの見栄だった。だが他人は、

——若い時から、罵詈雑言のされ通しで、馴れっこに、なってござる。

と、まるで有楽が鉄面皮のようなことさえ、人々は口にした。だが、当人にすれば、とんでもないことだった。誹謗などというものは、されれば、されるほど、骨の髄までしみ透る。神経質に、ぴりぴりと身にこたえるものである。とても馴れなどするものではなかった。

（人間は誰しも好いこになりたい。良く想われたいと思えばこそ、そのように見せかけたがるものなのに、俺だけなんで、悪態つかれ通しで。それに堪えていけようぞ）

と有楽は怨めしさに、いつも身震いした。

そして、誰かが、自分の名を口にしてるのをきくと、それが、なんでもない話でも、

（蔭口されている。譏られている）

と悪口にしか聴けなかった。だから、うわべは、平静を装っていても、内心、いつも有楽は、びくびくしていた。

いやだった。堪えようもなく不快だった。

——おりゃ、なんで、こんな目に逢わんならんか。苦しうて、辛抱できん。

情けなさに、いやな曖気が、いつも出た。（いっそのこと名のりを変えてしまいたい）とも思った。

信長の次の兄の信行が、むかし謀叛をしたと殺され、その子の信澄が、津田姓を名のったように、自分も織田姓をすて、気軽になろうと考えもしたが、それも出来かねた。

兄になってる信長の死因を、はっきり突きとめる為には、あくまでも織田姓で居なくては、てんで、意味がないような気がしたからである。

——情けなや。

有楽は、へこたれきって、蔭では悲鳴ばかりあげていた。なにしろ、あの本能寺の変のあった六月二日。洛中に

いた織田一門や譜代の者で、生き残れたのは、なんとしても有楽一人だけなのである。だからよけいに辛らかった。

表むきは本能寺にしろ二條御所の信忠の方にしろ、そりゃ一人残らず討死、ということにされている。

だが人間は、そうあっさり死ねはしない。

有楽の立籠っていた二條御所の味方にしろ、半死半生の者もいたろうし、気を失っただけの者もいた筈だが、それらが皆、焔に包まれ飛ばされ、（見事な討死）にされている。

本能寺のごときは、厩中間や手伝い女までが、性別も判らぬ黒焦げの屍体で出てきたから、

（さすが上さまの御側衆。一人も逃げんと、みな、冥途のお供を、してゆきなされた）

と口々に賞讃されているが、何も遁れなかった、のではなく、逃げられずに、包みこまれて焼き殺されてしまった、だけなのである。

つまり、〈何者〉が寄手なのか……判らせぬように、本能寺は物凄い火力で吹き飛ばされ、一人残らず、口のきけぬ黒焼きにされ、二條御所の方も、やはり強力な火勢に煽られてしまって、逃げようにも遁られず、みな白骨になってしまったにすぎないのだ。

だから、〈何者〉が謀叛して押寄せ乱妨したか、本当のところは皆目、知れはしない。

ただ二條御所の方だけは、包囲されてすぐ二人の脱出者がいた。一人は尾張苅屋城主の水野宗兵衛。

この者の長兄水野信元は、信長が子供の頃から仕えた古い家人だったが、先年、武田方に内通の疑いをもたれ切腹させられていた。

だから世間は、宗兵衛が脱出したのは、

——兄のことを想えば、まあ無理もなかろ。

と、比較的、おだやかな眼でみたものの、甥にあたる徳川家康だけは、宗兵衛が脱出後、光秀の幕下にあって行動をしたのを憤り、

——不所存者。

と目通りを許さず、宗兵衛は、その後、病死とも生害ともいうが間もなく歿くなっている。

脱出者の、あとの一人は、有楽。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

当時の、織田源五郎長益であるが、宗兵衛のように進んで明智方へ加わったのではなく、（おかしや）と思えばこそ、単身で、二條城をぬけ出したのである。

それなのに世間の人々は、口を揃え、

——まんだ十三歳の年端もゆかぬ、信忠さまの弟君の御坊源三郎さまさえ、天晴れ、城を枕に華々しく討死されとるのに、源五さまは卑怯未練。命惜しさに一門を見棄て欠け落された。

と評判され「臆病者」の烙印を捺してしまったのだ。

それに甘んじながら、有楽は、宗兵衛なきあとも唯一の生存者として、信長殺しの真相を摑もうとしたが、まったく手掛りは杳として摑めなかった。

情けなさに、そのころから、口をつぐんだまま、舌の先で、歯の裏側をぐるぐる舐め廻し、そして出かかる溜息を、ぐうっと嚥みこむ事を覚えこんだ。今となっては、それが有楽の癖にさえなっている。堪えられぬ濂りのような日々を、じっと有楽は、世捨てびとのように息をつめては暮してきた。

だから、頭をまるめ剃ったときも、世人は、得道し出家するものとばかり、勝手に決めこんだらしい。

ところが、案に相違して有楽が、利休の門下で、ひたすら茶の湯にこりだしたから、奇異に感じたらしく、

——仏門に帰依して、ごしょうを願われるのが、ご自身のためでもあり、織田ご一門の供養なのに、さてさて、げせぬ振舞いよ。

と、訝しがって、みな言ったものである。

3

ひとは死んでも、その家門が続いて、回向さえ欠かさずに、その檀那寺へ続けて居れば、必らず成仏すること疑なく、九天へ昇れたら、やがて安心立命でき、

（また生れ変って、この世へ戻ってこられるものである）

と誰もが、固く信じている世の中だった。

（いま生きている、この現代のことはよう判るが、さて、来世のほうは、どんな所か見当もつかん。だから死んだにしろ、早いところ、いまの現世へ戻ってきたいもので

ある）

と、みな願望していた時代だった。だが、その為には檀那寺の坊さまに、欠かさず供養を、続けて貰わねばならぬ。それにはどうしても、ずっと布施料を、納めんことには駄目である。そこで誰もが、供養を続けられる〈家〉を、とても大切にした。

そこで、己が家門を存続させるためには、親は子を見殺しにしたり、その連添う者も見棄てた。如何なる犠牲を払っても、あくまでも家名をたて、後生を願って菩提を葬う家を残したがった。それが、現世に生きる者の勤めだった。

なにしろ家が滅びてしまっては、檀那寺へ布施が届けられぬ。坊さまが、そのため供養を怠ると、回向されない魂魄は、宙に迷ってしまう。

それでは、現世へ生れ換って来られず、あの世で難儀するからである。

また「一人出家九族昇天」という思想もあった。

（一人が出家して僧侶になれば、その一族は愚ろか九等親までが、揃ってすぐにも天へ昇れ、そこから現世へ、早々と戻って来られる）

と信じられてもいた。だから何処でも一人位は仏門に入っていた。ところが織田一族には、僧侶になった者は、誰もいない。そこで、

——なんで、髪を落されたら出家なされぬ。

眉をひそめて、みな有楽を責めなじった。

——いや、そのうちに、数珠を頂きまする。

と仕方なしに、そんなうけこたえをした。

なにしろ、合戦のときでも（憎い相手なら、たとえ殺して首をとっても、その遺族が残って居れば、ひそかに檀那寺へ供養し、その菩提を葬い、やがては、この世へ生き返らせるもの）と安心ならず、

——もし身内の者を残して回向され、本人が再生して来られては、仇されて後が厄介至極。

とばかり、女子供まで探しだして、これを根絶やしにしてしまう程、〈輪廻〉というものが信じこまれた世の中だから、敢えて有楽も、それにさからえなかった。

だが、当人としては、来世や、生れ換ってくることよりも、いまの現世で「あの六月二日に、なまなましく自分一

人しか見ていない、あの謀叛の木当のところを、なんとか、ときほぐしてゆく」仕事の方が必死だった。

そりゃ有楽だって、寺へ入って、その手づるで、兄を殺した手掛りが見つかるのなら、墨染の衣でも、お薬師派の白衣でも、どちらでも着たであろう。だが、そんな生やさしいことで、見つけられるような、信長殺しの解死人ではなかったのである。

4

織田一門。つまり彈正忠から備後守になって死ぬまで、父信秀は、四十二歳の生涯に、男十二人、女十一人の子供を残したが、細川昭元に嫁いでいた於犬御前も最後に亡くなり、今や生き残りは男の有楽一人きりである。

そのせいなのか近頃は、面と向って、父信秀のことを、

——天文二十年（一五五一）三月三日にそのご生涯をおえられるまで、二十三人も、お子さまを作られたとは、さてさて大仕事。十八歳ぐらいから、次々と年児で拵えられた勘定ゆえ、さだめし、人なみすぐれた女ご好きの方で、ござりましたろうな。

などと、からかい気味に、兄信長の死後は、いらぬ詮索をする者もいる。

——わしは末っ子で、おやじの殿の歿くなった年に生れた者ゆえ、お顔も、てんで覚えてもいぬが、身内の話では、女好きどころか、あべこべと、聞いて居りまするぞ。と、有楽が云い放ってやると、きまって、

——まさか。と、誰も妙な顔をしてみせた。

だが、父信秀の女嫌いは、本当である。

織田家といっても、信秀の生れた家は、尾張の守護代斯波の奉行職織田本家のまた分家で、尾張八郡のうちの一郡の四分の一ぐらいな所領しかない勝幡の城だった。

いまの前田利家の伯父与十郎が尾張海東郡荒子城で三千貫の身代だった頃、父信秀は、その十分の一もない身状だったらしい。

大きな領主なら、首名衆とよばれる重役どもに委せて、己れは印判だけ捺して居れば済みもしようが、父のような中小勢力では、戦をするにも自分がまっ先に槍をふるい、駒かけて先登に立って奮闘するしか途はない。

そして、身辺を固めてくれる者も同族だけである。

ところが、一門、親族といった同族は、すこしでも勢力を伸ばしてくると、やっかむのか、えてして協力は余りしなくなる。

父信秀には、与二郎、孫三郎、四郎次郎、造酒丞といった弟はいたが、どうしても、新しい同族を、もっと拵えゆくしか、中小勢力としては発展のしようもなかった。

大領主なら、それ相応の隣国の大名からでも嫁とり、婿とりをして、その里方と協力しあって、国境を守り、他国へ攻めこめもするが、父信秀のような小城主では、そんな大層な所からなど、嫁のきてがない。

と、いって、釣合のとれた所から妻を迎えてしまっては、それ相応の合力が得られるだけで、余り先行きの発展も望めない。そこで父信秀は、正妻をきめずに、たとえ二百でも三百でも兵力の集められる国内の土豪を探し、片っ端しから、その娘や妹を借り、己が子を産ませるようにした。

自分の娘や妹が信秀の子をつくり（お腹さま）になっては、その親や兄たちは、どうしても、織田の同族となって、一緒に頑張って戦わざるを得ないから、見るまに父信秀の勢力は拡張されていった。前田与十郎も、娘が女児を産んで合力し、青山与三も、娘が、二郎のちの三郎五郎を儲けたから味方し、平手中務は、末の娘が、三郎のちの信長を作ったから、これも仕方なく同族になった。

林新五郎兄弟みたいに、己れらの姉が嫁入った土田久安の娘が、うんだ四郎のちの信行を立てようと、謀叛しかけた者もいたが、これらの新しい同族を作った、おかげで、父信秀は、ついに尾張八郡の名主にまで、成りあがれたのである。

とはいえ、好きな女、きれいな女を選んだのではなく、ただ、その父兄の兵力にだけ目をつけ、婚閥を作るために、次々と、種馬のような苦労をしたのだから、父信秀も、なみ大抵のことではなかったらしい。

朝倉浅井勢と宇佐山で戦ったとき、森乱丸の父三左と共に討死した三人上の兄の織田九郎の母御前などは、有楽は、その顔を今でも覚えているが、市江の豪族後東の娘で、蜂に刺れたように痘相の痕がひどく、鼻のひしゃげた、すごい面相で子供心にも怖しかった。

だが、女たちの器量のよしあしで依怙贔屓などすると、その親兄弟がうるさいから、父信秀は、公平に「一腹一子」という家憲をこさえ、女が身ごもると、その岳父を、生れる子の御守役のように扱って家臣の列に加えてしまい、そして次の女をと物色したらしい。

だから兄弟二十三人、みな異腹である。

幸い父信秀は色白な偉丈夫で、女に好かれる型だったから、何十人もの女が、喜んで、その子を産んだのであろうが、気張って子種をだす方は、そこは腕や脚みたいに思い通りに、動くところではないだけに、相当無理をして、さぞ大変だったろうと想われる。

三河安祥攻めのとき、長陣になって月余にわたったから、見かねて近臣が伽ぎの娘をすすめたところ、父信秀は、手をふって、

——わしは、女ごは、好きじゃない。

憮然とした面持で、泣きつらを見せたと伝わっている。

ひとは、三十人も妻をもった父信秀が、「女嫌い」と云うと可笑しがるが、普通の者なら、一人もっても持て余す妻を、それだけ次々と抱えたら、厭やになるのも、これは当たり前であろう。

その数多い女の中で、一人でも気に入った者が居れば、その産んだ児を、跡目にするように、そっと遺言でも書いていたろうが、父信秀は死んだ時、てんで何もしていなかった。

つまり生涯、好きな女は一人も居無かったらしい。

三男の信長が跡目をとったのも、妻の実家の父が、近隣になりひびいた美濃の斎藤道三で、その財力と兵力がものを云ったのである。

——もし、おりゃが、もっと早よう生れて居って、当時のことゆえ、駿河の今川の娘でも妻にしていたら、跡目が此方に廻り、その後の天下の形勢も、まったく変っていたろうに……。

と有楽は、今でも時々そんな空想をする。

5

兄の信長は、髪のもとどりを垂直に立て、薄竹の甘皮で、きりきり結えさせ、竹の茶筅と同じ恰好のものを、頭

にのせ、当時これを、
〈茶筅まげ〉と名づけて、流行させた。
その上、次男の三介を、
〈茶筅丸〉と改名させて、もっぱら茶湯の給仕に用い、当時、銃器の弾薬である硝石を一手に輸入していた納屋衆とよばれる堺の者を接待させた。
もちろん、兄の狙いは、軍事目的とは判っていたが、時たま茶事にかり出されて、手伝いを云いつけられる有楽は往生した。
ふつうの武家は白湯といって、茶の葉など奢ったものは入れぬのが慣わしで、遣唐使によって持込れたと伝わる茶のごときは、禅寺などで、薬湯にして用いるものと思っていたから、時たま、啜っても、薬みたいに苦くえごいだけだった。
ところが、そういう赤黒い唐茶でも閉口なのに、信長が用いだしたのは、青黒い、まるで草の生汁みたいな緑茶だった。だから有楽は、つき合されるたびに、へどが出そうだった。
話に聞いたところでは、南北朝合戦の頃から、〈闘茶〉とよぶ、蓋つき碗の中身を当てる勝負事から始まって、当時の茶どころの栂尾産を「本」その他の土地の物を「非」とわけて、〈本非の沙汰〉という賭事が流行しだし、その裡に、粉をひいた茶を四種も混合して、よく攪拌してから、これを口にふくみ、舌先で、十回味わって、次々とその分量を云い当て、もし当たれば、これは来客側の儲け。
当たらなければ、十回の賭金が、ぜんぶ主人側の亭主の利得になるという、
〈四種十服勝負〉が、足利時代に入ると室町御所の名物になって、飲茶賭博にあけ暮れしていたそうだ。
だから、謡能、華道と同じように阿弥と総称される連中が、同胞とか〈同朋衆〉の名で呼ばれ、〈茶頭〉の名で、茶事博奕の勝負師として抱えられだしたのだという。
有楽の幼かった頃の覚えでは、まだ津島の国府宮あたりでは、当時の名残りの賭け茶屋があって、青旗をだした緑茶の店では、品種当てが一文のもとで十文。
蓋をあけて茶柱が立ってるかどうか。すぐ勝負のつく紅旗の茶店の唐茶は、当たれば五文の儲けで盛んに繁昌していたようである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.